

フッサール初期時間論の基本概念とアポリア (II)¹⁾

宮 原 勇

第1章 §39 「過去把持の二重の志向性と意識流の構成」に関する解説

(1) 時間客観とそれを構成する志向的意識作用とその自己構成

§39は、1905年になされた「内的時間意識の現象学についての講義」²⁾の原稿がその大部分をなしている第1章や第2章ではなく、第3章に収録されたもので、草稿番号 FI6 Bl. 67-74の最後の部分である。年代的には、1909年より後で、1911年以前のものという。

まず、フッサールは、〈持続する〉現実の出来事としての一つの過程、ないしは客観 (Objekt) を想定する。それは、「持続する」という表現に見られるように〈時間の中で存続する対象〉であり、それ自体「流れ」(der Fluß) である。それは彼の表現では「客観の流れ」であり、それぞれ認識の対象として、一つの統一体をなすという。具体的には、「時間客観」と呼ばれる「音楽のメロディー」や「ビリヤードの球が転がっていく運動」などを考えてよいが、「運動」の場合、空間的規定がクローズ・アップされるので、空間的方位性はあるものの、より時間的変化そのものに近い「メロディー」の方が考察の対象として適していると言える。その場合、当然のことながら、例えばピアノから流れてくる音響であるとか、スピーカーから流れてくる音響といった、外的な物理的事象が厳然としてある。そして、音響の源泉は「ピアノ」だとしても、そこから生じる空気中の振動としての音は、それ自体が「対象」となって、鼓膜を刺激するのであり、聴覚神経の刺激の原因となっている。その場合、われわれの意識としてはどれが「対象」なのかは、簡単には特定できない。つまり、知覚などの認識作用の物理的原因が、そのような認識作用の「対象」であるという、知覚因果説のような素朴な想定は現象学的には認められない。

客観の流れに対して、「主観の流れ」というものが対峙される。フッサールにおいては、認識対象は、感覚与件に対して〈意味〉(言語的「意味」というより、「概念」と捉えたほうがよいような要素) を付与する志向作用によって構成されると考えられるのであるが、前述の一つの客観の流れとしての対象を構成する主観的意識作用自体も、意識の領域に見いだされる一つの「主観的」流れであるという。カントでさえ『純粹理性批判』で再三強調したように、外界の事物に関するわれわれの認識は感覚(ないしはカントの意味での「直観」)より始まることは確かである。フッサールでも、そのようなカント的構図は保持されていて、知覚などのわれわれの認識は外部からの刺激により感覚的印象が生ずることから始まり、そのような感覚に

よって意識の志向的働きが動機づけられ、感覚与件に「意味」が付与されるのである。

フッサールの認識論では、意識の内部において、その意識に対して、「超越している」(transzendent) という意味で「外部」にある対象に関する表象 (Vorstellung) が成立すると考えられるが、しかし、志向作用 (the intentional act) 自体を意味する「志向性」(intentionality) は、われわれのその都度の意識内容を形成している主観的な内在的要素である。『イデーニ I』(1913年)の時期のフッサールは、そのような要素を、われわれの意識にとっての「実的」(reell) な要素と言う。つまり、外的事物などや脳内の生化学的現象などは「実在的」(real) なものであるが、意識を実際に構成していて、われわれの反省的意識にとって対象となりうる要素は、「実的」(reell) という。フッサールの現象学では、上記のような客観的对象、ないしは対象性 (フッサールの場合、「対象性」(Gegenständlichkeit) とは、Meinong の Objektivität と同様に、単独の個体的対象ではなく、〈～は～である〉という複合的对象としての事態 [Sachverhalt] を表している) は、あくまでも意識内容とは違って、志向作用が目指している方向の先にあるものなのである。それは、意識に対して、空間的外部にあることを意味するのみならず、抽象的普遍をも含む対象性である。したがって、意識の内部にある、意識作用自体や感覚的要素なども志向的意識作用の対象になりうる。しかしながら、その場合は、「超越的对象」とは呼ばない。それらの要素は、対象化されているとはいえ、「内在的」対象である。

さて、以上のことから、認識の第一段階として、次のように記述することができよう。素朴な実在論的想定においては、われわれの意識の「外部」にあつて、志向作用、つまり〈志向する〉(intendierend) 作用によって、〈志向された〉(intendiert) 対象が「客観的对象」として措定された。そして、そのような対象自体、時間的に変化する対象としてわれわれの時間的对象性を構成する志向性を前提するとされた。そして、そのような志向的意識作用自体、反省的意識作用の対象となるのである。そして、それは志向的意識作用自体が反省的意識作用の対象となるという自己関係性の回路の中で確認されるメカニズムである。このような、人間の意識の反省的構造、言い換えれば再帰的回路の存在は、人間の「意識」の本質として、否定できないものである。そのような意識に固有の自己回帰的構造によって、客観的对象性を構成する主観的对象性がテーマ化され、志向的意識分析の対象とされるのである。

端的に表現すれば、音楽の音、あるいは単なる物理的音響の変遷が、志向作用によって認識されつつあるとして、それはまずは音の流れがあり、そして、それを構成する志向的意識作用の流れがある。そして、後者の志向的意識作用は、それ自体の特質として、自己関係的、再帰的志向作用を有している。つまり、自分自身を対象化することができる。フッサールによれば、それ自体、志向性であるような主観の流れは、自分自身を対象とする反省的意識作用によって、構成されるのである。それは自らが構成するのであるから、「自己構成」の問題として、捉え直されている。言い換えれば、「意識の流れ」(the stream of consciousness) は、「一つの持続する意識」(an enduring consciousness) として、「意識の内部領域」(the inner field of

consciousness) の中において、構成される (constituted)。

上記の理論によれば、「持続の統一」と「持続意識の統一」とが、類比的 (analogical) な仕方
方で構成されることになっている。ということは、時間客観を構成する志向作用自体も「時間
客観」として自己構成されるので、「時間的今、以前、以後」という関係性の中で構成される
ことになり、第一次的な客観の時間性と共に、構成的意識作用の時間性が問題となるというこ
とである。

以上のことを図式化すると次のようになる。

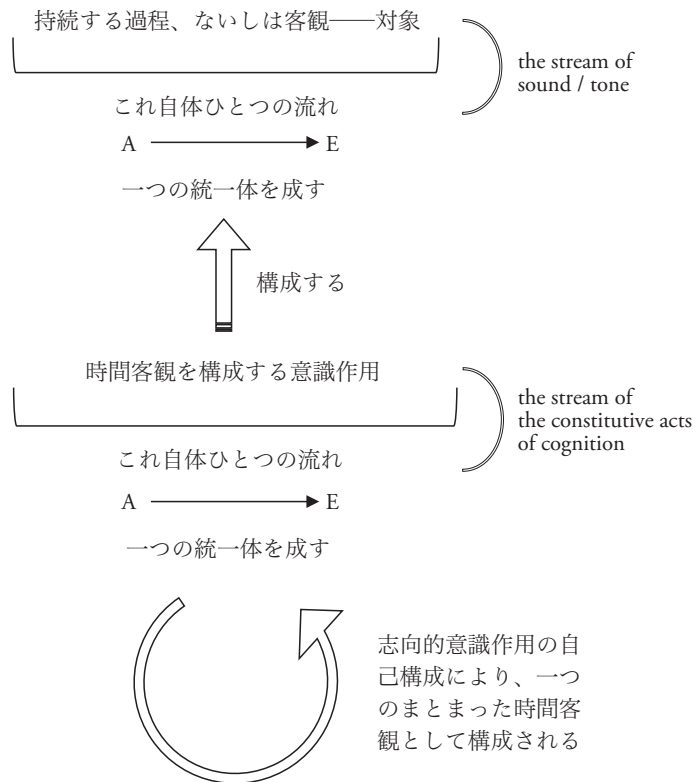


図1 時間客観と構成的志向作用とその自己構成

(2) 志向性の二段階、ないしは志向性一般の普遍的構造としての二重性

フッサールは時間意識の分析をする際に、まずはピアノの音のような物理的音響を聴覚意識内の音響感覚として内在化し、客観の流れとしての時間客観を〈内在的な時間的統一体〉へと移し替える。それは、われわれの意識の外部の対象として、志向されたままの事象であれば、その時間位置を分析するということは、客観的な物理的時間位置を問題とすることになり、単にそのような客観的な時間を意識上の時間位置との対応関係において問題にするに過ぎなく

る。しかも、時計などによる客観的時間位置の測定は、現象学的分析にとって意味のないことであるから、そのような客観的時間は、現象学的分析が開始される時点で、排去されることになる。したがって、外部空間の特定の場所に位置するピアノにおいて音が発せられるその瞬間と、その音が空気中を音波として移動し、われわれの鼓膜に達して、それを振動させるまでの〈時間上の隔たり〉に関しては、考慮せずに済ませることができる。ということは、内在的時間感覚とそれを志向作用によって意味付与し、特定の対象として知覚するということは、「同時」であるとみてよい。したがって、次のような関係になるのである。(α)客観的流れが、内在化されて、内在的時間統一体と看做される「意識流」と、(β)その客観的意識流自体を構成する志向的意識作用から成る「意識流」とが区別される。しかし、「この二つは、唯一の同じ意識流」であるという。(α)は、内在化されたとはいえ、あくまでも「音」という対象に向かっている志向性であり、その意味でフッサールは、「音の志向性」と呼ぶ。「音」が志向性を有するわけではない。意識は、その際、特定の「音」に注意を向けており、そのような志向性は、対象として「音」を狙っているのである。志向性とはその都度の意識作用そのものを意味するが、そのような作用自体は絶えず推移する流れであり、変化しつつある。そのような流れはその都度の「位相」(Phase)、つまり〈局面〉から成り、それぞれの局面は、連続し、結合し合っている。この場合、志向性の対象となっているものは、あくまでも内在化された「音」である。しかし、(β)では、そのような意識作用から成る「流れ」自体に注意を向けることもできる。「意識流を対象とした志向性」ということになる。

(3) 過去把持 (Retention) の有する二重性

フッサールによれば、(2)で述べたように志向性はそれ自体が意識流であるので、自らの対象に向かう「志向性」とそのような志向的意識作用の連続的統一体としての「流れ」に志向的注意を向けて、対象化することも可能であり、そのような対象化は絶えず起こっている。ということは、われわれの時間意識において現れる「第一次記憶」(ないしは短期記憶)である過去把持でも、二重の志向性を有していることになる。フッサールは、「過去把持はみな、意識の射映 (Abschattung) であり、二重の志向性を有している」という。(2)で言っている二重の志向性とは、〈対象についての志向性〉という層とそのような志向性自体を対象化する再帰的志向性としての〈意識流についての志向性〉であった。後者の志向性を特徴付ける際にフッサールは、何らかの「反省的意識作用」が働いているとは言語表現上、明確には言っていない。ただ、まずは、外部の事象としての「音」に向かう志向性が成立し、そして、そのような意識作用自体が意識に内在し、絶えず変化しつつある連続的事象であり、しかも何らかの同一性をその都度有している限り、志向的意識作用の対象となりうることを前提に、第二の志向性が成立していると述べているのである。フッサールの用語法では、「～を構成する」ということは、〈～を対象としている〉ということであり、「対象化」しているということであるから、

一般に何らかの意識作用が生じれば、常に、そのような意識作用自体が対象化されて自己構成される可能性を示唆していると解することができよう。

さてここで、「過去把持はみな、意識の射映であり、二重の志向性を有している」という言明が意味していることを確認したい。過去把持は「音」という時間的に変化する時間客観を認識する際に重要な働きをする意識作用であり、その「音」が内在化されて「音の感覚」となっても、それは同様である。具体的には、まず音が鳴り、その音の感覚が新鮮な印象ではなく、記憶の底に「沈下」しようとしている音の感覚を、一時的に保持している状態を「過去把持」という。

上記のような音を対象としている志向性と同時に、われわれの意識には、過ぎ去った過去の「今」において音を聴いたという感覚についての短期的記憶、つまり「過去把持」とそのような過去把持自体を対象とし、一つの志向的体験として「過去把持」を構成している志向性が存在する。つまり「第一次記憶という統一体を構成している志向性」が存在する。

結局、フッサールは次のように考えている。過去把持とは、①対象がまだ忘れ去られてはいないという意味で〈まだ意識している〉という意味での Retention である。しかし、②そのような Retention という志向作用自体を内在的对象とする Retention も成立している。つまり、第一次記憶である過去把持自体を構成する作用としての過去把持も成立している。下記の二重のプロセスがある。

- ①音の過去把持
- ②音の過去把持自体を対象とする過去把持

(4) 自己触発の問題

しかし、よく考えると、ある物理的音響が生じ、それが聴覚神経を触発し (affect)、聴覚的感覚内容が生ずるという段階があり、そのような内在化された「音感覚」について、第一次記憶たる過去把持が生じるというメカニズムは、外的対象→触発→感覚→過去把持という流れになっている。それに対して、意識の内在的領域で生じた志向作用としての過去把持自体も内在的对象として反省的意識の対象となるということは、内官に対して刺激を与えるという「触発」の作用から始めなければならない。それは意識内在的对象による触発であるから、「自己触発」と言ってもよいであろう。内的対象→自己触発→感覚→過去把持となるだろう。〈音の過去把持の過去把持〉とは、感覚としての「音」による自己触発、そして、志向的意識作用自体の感覚が生じ、そして感覚としての「音」についての志向性が生じ、それに対して過去把持が成立するというものである。

フッサールの記述では、「触発」や「自己触発」といった文言はなく、①過去把持が生ずれば、自動的に別の②過去把持が生ずると考えている。つまり、過去把持という意識作用は、そ

れ自体内在的対象として反省的志向作用の対象となり、内官に対して触発を与え、何らかの感覚を生じせしめ、そして構成的意識作用の働きによって、一つの連続体として成立すると、明確に考えていたと証拠立てる文言は見当たらない。ただ、過去把持が生ずれば、自動的にそれ自体が過去へと沈下してしまうのを一時的に掴みとどめておくという過去把持が生ずると考えていたとみてよいだろう。ということは、まずは、過去把持は、知覚や想起や想像などの独立の志向作用ではない。後者は、どれも感覚や意味付与、対象性などを有しているのに対して、前者はそうではない。

(5) 過去把持の図表化

ここまでの分析で次のような図表(図2)を描く事ができる。まず、客観的時間系列(それぞれの時点の系列)とそれに沿って鳴らされた「音響」、そして、その音響が知覚された感覚的印象、そしてそれが記憶の底に向かって沈下していくのを留めておく、過去把持。その最初の過去把持は、感覚印象としての音の過去把持であり、いわば「直接的過去把持」である。しかし、次の段階になると、その過去把持自体に対して過去把持という作用が生じる。しかし、直接的過去把持はその内容として最初の「音」の感覚内容を内に宿しているが、過去把持の過去把持という形で間接的になった過去把持に於いても、その作用の内には志向された対象に対応する志向内容が宿されている。

表示すべき要素としては、一定の方向性があるベクトルとしての時間の矢と、その矢に沿って流れる時間客観としてのメロディー、ないしは音の系列。その音は、その音になった時間点(Zeitpunkt)と重なっている。しかも、その音が鳴った時点で、意識にとっては、聴覚神経を刺激し、感覚印象(impression)を生じせしめる。ある時点で、例えば、Cの音を聴いたとすると、それについての感覚印象が生じ、それがなにかのメロディーの開始の音であるといった知覚経験が生じるかもしれない。ということは、Cの音が鳴った時点で瞬時に知覚経験が成立することもある。しかし、フッサールは、感覚印象が生じた時点で、すぐに次の出来事が生じ、それに対応して意識の作用も変化すると考える。例えば、メロディーが開始し、それ以降様々な音によって展開されるとする。直前に鳴った音は次に鳴った音とともに「まだ記憶に留めておかれる」状態である。それは、直前に知覚された感覚印象の内容に関して、まだ短期記憶(これは「ワーキング・メモリー」working memoryと言ってもよいだろう)にある段階で、第一次記憶が成立していると考えられる。そのような第一次記憶、つまり「過去把持」は、まずはCの音についての短期記憶と、Cの音について感覚印象が生じたという内的体験自体に関する記憶が形成されるはずである。それが「感覚印象の過去把持」であり、さらにそのような過去把持についての過去把持が生ずる。つまり、「感覚印象の過去把持の過去把持」が成立する。このようなプロセスがそれぞれの段階で成立し、 n 乗の過去把持となる。ただし、短期記憶の連鎖が形成されるとしても、もとを辿れば最初の感覚印象まで行き着く線が繋がって

いるはずである。しかも、それぞれの時点 t_i では、下方に展開している短期記憶の連鎖がつながっているはずである。以上のことを、便宜上、 t_i 時には、音 A_i が鳴るとして、図式化すると下記のようなになる。

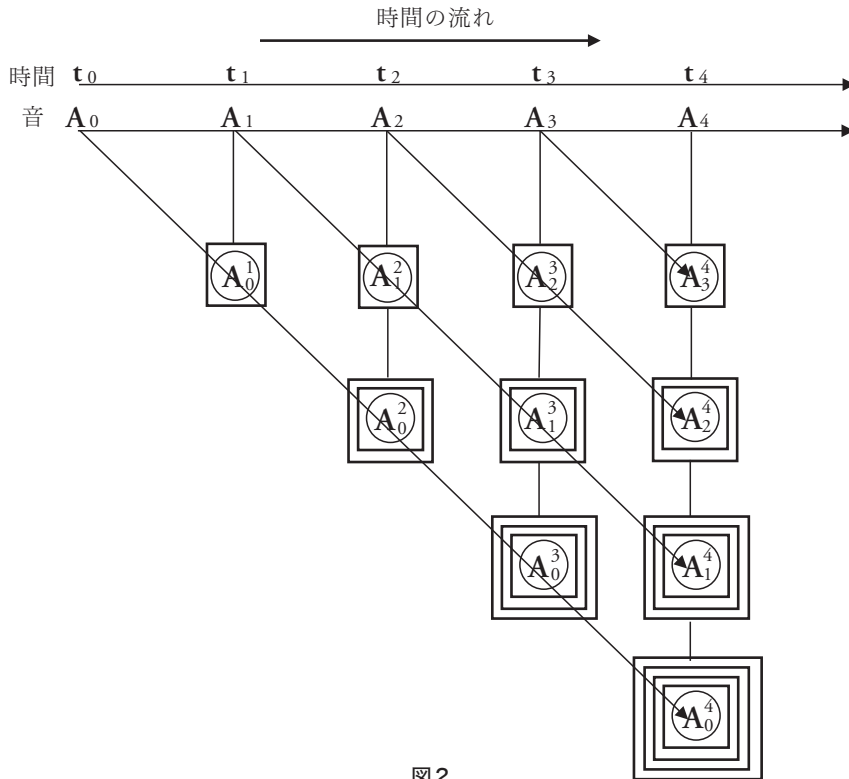


図2

(6) 過去把持の成立のプロセスと「横方向（水平）の志向性」

再度、単一の過去把持の成立のプロセスだけを簡単に図表化してみよう。

図3のようなになる。

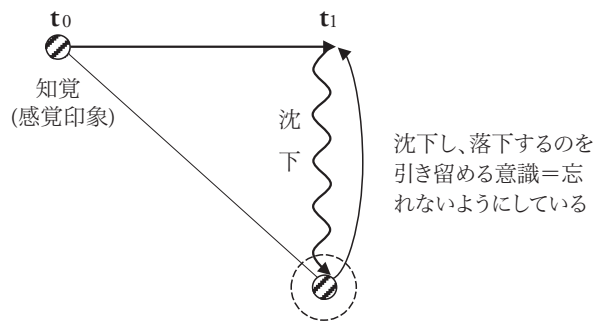


図3 過去把持の成立のプロセス

このように、 t_0 時において知覚された時間対象は、内的感覚として t_1 時には記憶の内部に沈下するのであるが、それを忘却しないように意識の内に留める作用が働く。つまり、顕在的意識へと引き上げようとする力が働くのである。つまり、沈下と引き止めという二つの相反する方向の動きが生じている。図3の斜線で塗りつぶされた円は、時間対象である音の感覚印象であり、 t_1 時での点線の円は感覚印象が過去把持によって捕らえられていることを示している。まず、外的現象である音響現象が生起し、それがまさに内在化し、そのことによって単に感覚的な印象で消滅するのではなく、意識の内にしばらくは残留する。そして、その限りで記憶 (memory) が成立し、意識内の他の要素と関連付けられ、場合によっては「動機づけ」という作用を引き起こす。

さらに、過去把持自体を「知覚」している意識作用がある。既に述べたように、忘却として消滅するのではなく、意識の内に留めておくという「過去把持」もそれはそれでひとつの意識作用であり、内的時間対象であるから、そのような作用が生じた限りは、その作用自体をターゲットとする反省的意識作用によって対象化される。しかし、それは最初の志向作用であった外部知覚とその感覚印象が過去把持されるのと同様に、いわば「内部知覚」という作用が起動し、その「過去把持」自体が対象化されて、それが記憶の底へと滑り落ちるのを食い止めるのである。この§39では、フッサールは、全て外的対象に関する知覚であろうと、感覚印象として内在化した感覚内容に向かう志向性として考察しているので、どの時点で内在化するかは、明確には記述していないが、感覚印象に対する過去把持であろうと、「過去把持」という意識作用自体を対象とする過去把持であろうと、それ自体は、自己意識的作用であることは確認しておかねばならない。

以上の記述を図にすると図4のようになる。

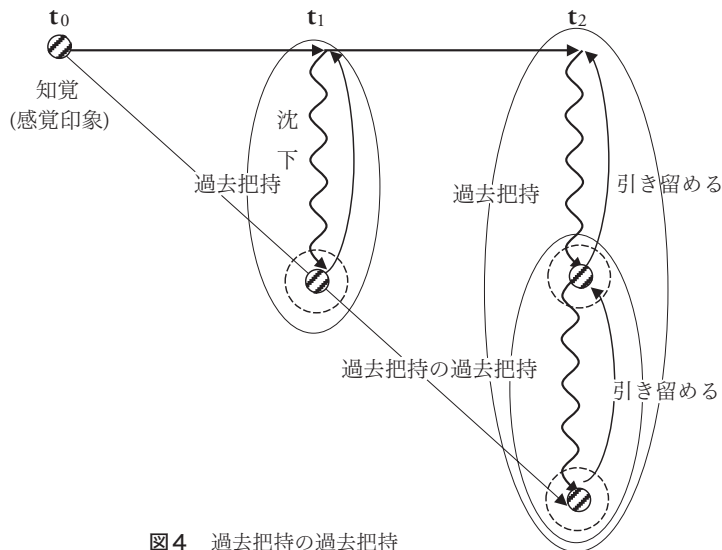


図4 過去把持の過去把持

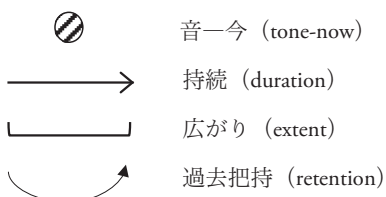
(7) 縦方向の図表から横方向のスキーマへの変換

下の表1は、時間の流れを横方向に、つまり〈左から右へ〉流れるとした場合だが、これをそれぞれの時点 (t_0, t_1, t_2, t_3) で、過去把持が時間の流れの方向である横方向に伸びていく記述に換えればどうなるだろうか。つまり、過去把持は、時間が経るにつれて右方向に展開していくような記述であり、時点のそれぞれ、つまり t_0, t_1, t_2, t_3 での感覚印象自体は動かず、新たな感覚印象が付け加わり、それにつれて過去把持の連鎖が右方向に伸びていくという記述も可能であり、過去把持が、時間の流れに「沿って」、あるいは流れを「貫いて」展開していくという言語表現にふさわしいスキームが形成される。

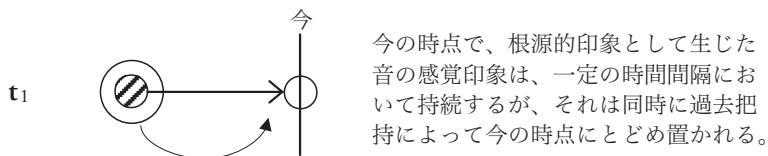
表1 過去把持の連続

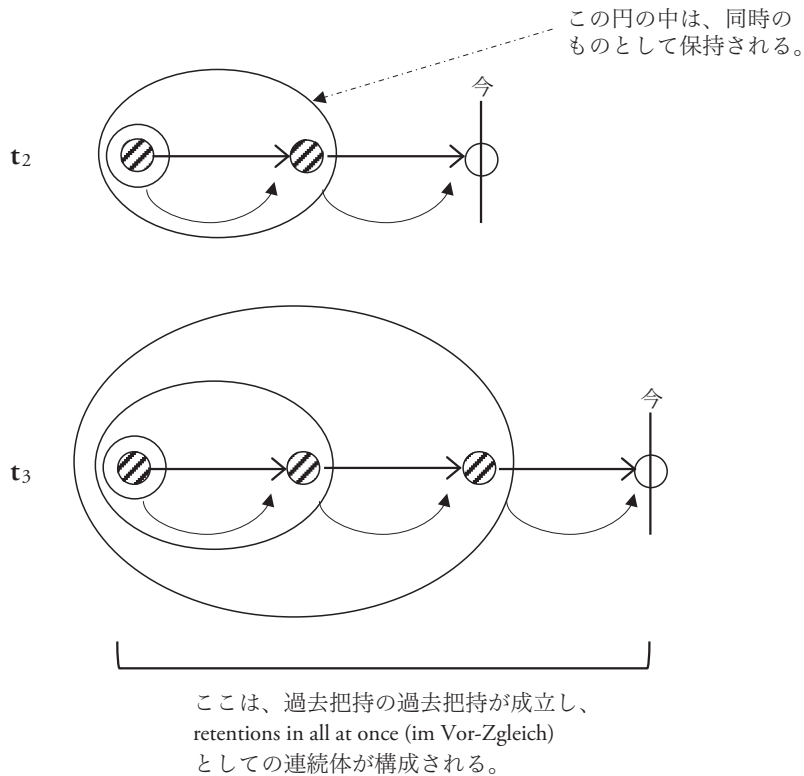
t_0	t_1	t_2	t_3
新しい根源的感覚の生起	先行した根源的感覚の直接的過去把持	先行した根源的感覚の〈過去把持の過去把持〉	先行した根源的感覚の〈過去把持の過去把持〉の過去把持

それを図に描くには、 t_0, t_1, t_2, t_3 のそれぞれに、それぞれの「音の今」(tone-now)と「持続」(duration)、「広がり」(extent)、「過去把持」(retention)を書き込む必要がある。それぞれ、順番に、斜線で塗られた○、起点と矢印からなるベクトル、起点と終点からなる線分、曲線を成す矢印の線として描くこととする。



上記のアイテムを使って、 t_1, t_2, t_3 のそれぞれのプロセスを時間の流れに沿って図示すると下記ようになる。





上記のような表記の仕方では、横方向（水平方向）が時間の流れがあり、そのような時間の横方向の流れを貫いて（durch）、Längsintentionalität（Broughの英訳では、the horizontal intentionality）が構成されるのである。具体的には、横方向の流れの中で、最初の根源的感覚印象が過去把持され、それが過去把持の過去把持に含有される内容として過去把持されるのである。しかし、それと同時に絶えず新しい「今」において、〈新しい根源的な感覚（印象）〉（a new primal sensation (impression)）が生じていく。このように絶えず成立していく新しい今において、過去把持は〈過去把持の過去把持〉となり、過去把持の連続体が形成されるのである。

(8) Längsintentionalitätの訳語について

ここで、Längsintentionalitätをどのように訳すか、考えてみよう。Broughの新しい英訳では、既に記したように the horizontal intentionality であり、この見解によれば、「水平志向性」である。水平（horizontal）か垂直（vertical）かは、明らかに平面上では左右方向が水平で、上下方向が垂直となる。しかし、längs- となると、entlang という前置詞、つまり「～に沿って」から考えると、元となる流れの方向、ないしは線が、どのような方向に動いているか、あるいはどのような方向で横たわっているかで、違ってくる。längs des Flusses という表現で言えば、そ

の「流れ」が、左右の横方向に流れているとしたら、そのような *längs*〜という表現は「横向き」の〜という意味になると思われる。

とはいえ、独和辞典によれば、大抵は、*Längsachse* は、「縦軸」と表記されている。他にも、*Längseinschnitt* は「縦切開」、*Längsrichtung* は「縦方向」、*Längsschnitt* は「縦断」という訳語が当てられている。しかし、英訳者 Brough によれば、旧英訳では、*longitudinal intentionality* とされていたのに対して、志向性を、その志向性の流れのままに自らに対して志向するという意味に解して、「水平的」(*horizontal*) と訳す。この志向性は時間の流れに沿って、それと同じ方向に走ると解釈している。フッサールでは時間の流れは、左右の水平方向として考えられており、上下の「縦」方向ではない。

また、§39の原文の *eine im Vor-Zugleich einheitliche Kontinuität von Retentionen* は、特にこの *im Vor-Zugleich* の意味がとりにくいが、われわれとしては、「複数の過去把持から成る、それ以前に同時にあるという様態において統一された連続性」と訳したい。Brough の英訳は、*a continuity of retentions united in the retentional being-all-at-once*、つまり「一挙に同時に過去把持されているものとして統一された諸過去把持から成るひとつの連続体」であり、われわれの図では、下記のような、一つの過去把持の内に統一される、それ以前の「局面」、ないしは「位相」(*Phase*) の同時的共在である。それを図示すると下記のようなになる。

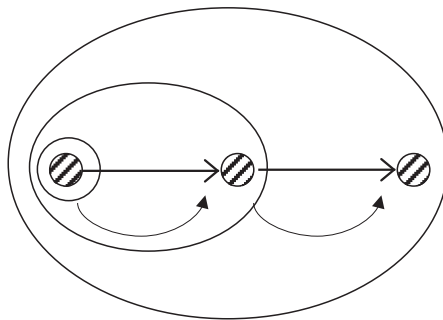


図5

これまでの説明では、*Längsintentionalität* とは、Brough が訳したように “the horizontal intentionality” であり、「流れを貫いて」進む志向性である。言い換えると、時間の経過とともに、水平方向に「拡張」されつつある志向性である。しかし、われわれの表1のような表示も可能である。それを対比して作図すれば下記のようなになる。

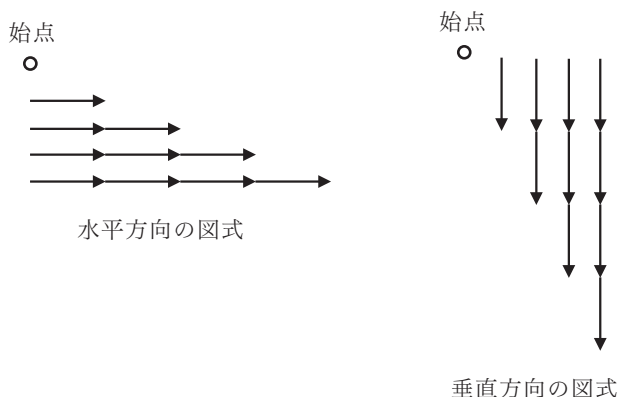


図6 水平と垂直

Längsintentionalität を従来の邦訳（立松訳107頁）のように「縦の志向性」とすると、上記図6の垂直方向のベクトルを表現していると解することになる。この解釈だと、われわれが前稿「フッサール初期時間論の基本概念とアポリア(I)」で論じた§10の「縦軸」(Ordinate)に対応すると思われる。つまり、この§39の Längsintentionalität は§10の Ordinate と同一であるという説になる。この Ordinate とは、数学用語としては「縦座標」を意味し、それに対して「横座標」とは、Abszisse であり、フッサリアーナ第10巻では、332頁に出てくる。そこでは、Abszissenrichtung (横方向) とある。

邦訳では、107頁11行目、原文では、フッサリアーナ第10巻81頁、22行目からの記述を分析し、「縦の志向性」という解釈が妥当であるか検討しよう。そこでは、次のように言われている。まずは、第一の局面として、第一次的な根源的（ないしは「原一」）感覚は、その根源的感覚の過去把持へと転化する (sich wandeln)。第二の局面としては、根源的感覚が過去把持されるその時点で、新しい「今」が生じ、新たな根源的感覚が生ずる。さらに、第三の局面としては、また次の瞬間に新しい根源的感覚が生ずる。第二番目の根源的感覚の過去把持が生ずる。第一番目の根源的感覚の過去把持の過去把持が生ずる。

ここで重要なのは、〈過去把持の過去把持〉ということでは考えられているのは、下記の図で薄い○の中の〈直接的に把持されたもの〉のみならず、だんだんと濃くなっていく丸枠の中のように〈間接的に把持されたもの〉への志向性をも意味している。そして、間接的な過去把持は、○で表現されている根源的感覚内容ばかりではなく、横方向に膨らんだ楕円をも内部に包んでいる。ということは、②の段階で生じている①に関する過去把持という志向作用（一つの独立した志向作用とは言えないかもしれないが、擬似的な作用と看做すと）に関する過去把持でもある。それゆえに、過去把持の過去把持というのは、下記の図では単に感覚内容のみに向けられた矢印ではなく、①と②をともに包み込む過去把持自体をさらに包み込む楕円として表現されるのである。

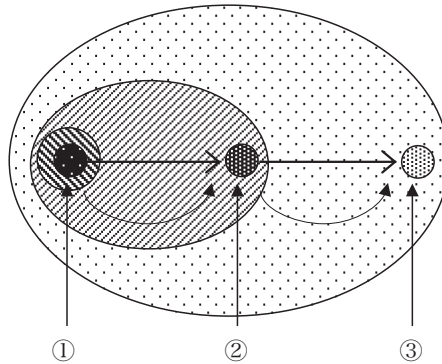


図7 過去把持の過去把持における間接性と直接性

再度確認しておきたいのは、③の時点で生ずる過去把持が直接的に把持するものは、②という直前に生じた根源的感覚②であり、それ以前の①時に生じ、それから②までの間に把持されていた根源的感覚①は間接的に把持しているのである。その意味では、過去把持の連鎖は、最初の根源的感覚から続く、「原与件」(Urdatum)、ないしは「第一次的与件」(the primal datum) に関係していると言える。

(9) 〈現れること〉と「現在化」

邦訳108頁の1-2行目について考えてみよう。ここで「この事情」というのは、〈過去把持の過去把持とは、もともと過去把持された根源的感覚への志向性でもあるということ〉は、「事物の現出」(Dingerscheinung, the appearance of a thing) そのものを「再現前化」(Vergegenwärtigung, re-presentation) すること、つまり現在化である「知覚」ではなく、あくまでも間接的認識活動である「再現前化」は、〈最初にその事物が与えられた志向作用自体〉を対象とするのみならず、その対象自体、つまり知覚された時間客観についての志向性でもある。

この指摘は、記憶に限れば次のように表現できる。

Aについての記憶は、時間客観Aを直接的対象とした記憶であると同時に、その時間客観を対象とした感覚的知覚などの志向作用についての記憶でもある。これを一般化できるだろうかを考えてみよう。

意識作用とは、それ自体内在的時間客観、ないしは時間対象であるから、それに対する意識作用を働かせることができる。その場合、意識作用自体が対象とされることと同時に、そのもともとの意識作用によって意識されていた対象に対しても、それへの志向作用であるということができる。その意味では、全ての意識作用は二重の志向性であるということができる。これは、意識作用としての志向性の一般的な構造である、反省可能性、言い換えれば自己対象化の可能性を示唆していると言える。つまり、意識作用が意識内で生じた場合、カントでいう「自己触発」が起こり、自らが意識作用を働かせているという自己意識が生じ、それを対象と

する内部知覚が生じ、それと同時に、そのような、流れ去ろうとしている意識内の志向作用自体に対して、それが忘却の内に沈み込むのを引き止めようとする過去把持が生ずると考えることができる。

一般的には、上記のように過去把持作用自体が過去把持されていくということは、意識作用についての意識作用として自己関係的作用であるとする、過去把持からなる連続体の内部においては、直接的過去把持の部分と〈過去把持の過去把持〉という過去把持の二乗の部分、そして一般的には過去把持の n 乗の部分とから成ると言える。そして、上記の図では n が増えている部分は、より濃い部分として表示されているように、より深い記憶の部分に入り込んでいる。ということは、われわれの記憶の内部は比較的記憶が鮮明で明るい部分から、忘却しかかっている暗い部分に至るグラデーションをなしているといえる。

そのようなグラデーションの変化には、滑らかな線形的変化とデジタル的な非線形的変化が考えられる。過去把持の n 乗という形で近い過去から遠い過去を区別するということは、なめらかなグラデーションをなす変化ではなく、デジタルな変化を示すに過ぎない。確かに、現在から過去への記憶の鮮明さは、理屈の上では、線形的で、アナログ的であると思われるが、これは感覚の性質上そう思われるに過ぎず、一つ一つの認識作用が独立した意味形成体を生じさせていくと考えれば、A という時間客観の次に B という時間客観が続くといった、個別的对象の秩序のみが重要であることになる。

ここで、いくつかの問題が横たわっていることがわかる。

そもそも一般には上記のことが成り立つが、時間意識の場合、もともとの対象は、音だとすると、そのもともとの音は内在化された音の根源的感覚だとみなされる。その感覚とは、それとは別の対象を有するような志向作用ではなく、志向性を有しない、志向作用にとっての質料 (hylé) なのではないだろうか。ということは、根源的感覚の段階では、まだ対象性が成立せず、それは完全なる志向性を有する意識作用とは言えない。

対象がまず第一に根源的感覚によって与えられるということは、例えば、〈ピアノの音は、直接的に鮮やかに与えられる〉ということで、それぞれの与えられ方の様態において出現しているということである。つまり、感覚されているということは、感覚的に与えられているということであり、それは現在的 (gegenwärtig) なものとして与えられているということである。この場合、時間規定が特定の志向作用、つまり「現在化」(Gegenwärtigung) において与えられているということである。つまり、時間規定は、「現在化」(presentation) により規定されているということになる。この「現在化」とは、事物が現前することであり、同時にそれが「現在」(present) 存在していることになる。

(10) 邦訳108頁5行目～17行目までの段落の解釈

邦訳108頁5行目～17行目までの段落について分析しよう。この部分では、

Querintentionalität と Längsintentionalität とが対比的に説明されている。

この段落は下記のようにになっている。

したがって過去把持的変遷の恒常性と、さらに「それらの変遷は常に絶えず先行する過去把持の過去把持である」という事情とにより、意識の流れの中で、その流れ自身の統一が一次元的な擬似的時間秩序として構成されるものと考えられる。(立松訳：108頁5行目～7行目)

Demnach, meinen wir, konstituiere sich im Flusse des Bewußtseins vermöge der Stetigkeit der retentionalen Abwandlungen und des Umstandes, daß sie stetig Retentionen von den stetig vorangegangenen sind, die Einheit des Flusses selbst als eine eindimensionale *quasi*-zeitliche Ordnung. (H.X., S. 82)

We believe, therefore, that the unity of the flow itself becomes constituted in the flow of consciousness as a one-dimensional quasi-temporal order by virtue of the continuity of retentional modifications and by virtue of the circumstance that these modifications are, continuously, retentions of the retentions that have continuously preceded them.

この英訳から、直接翻訳してみよう。

したがって、流れそのものの統一が、ひとつの一次元的な擬似的時間秩序として、意識の流れの中で、次の二つの事情によって構成されるようになると考えられる。それはまずは過去把持的変様の連続性によってであり、また、そのような過去把持的変様は、連続的には、いくつかの過去把持に連続的に先行している過去把持の過去把持であるという事情によってである。

ここの箇所の翻訳として重要なのは、*stetig* という単語である。これは、ハイデガーも『現象学の根本問題』(Die Grundprobleme der Phänomenologie, Gesamtausgabe, Bd. 24, 1974) で指摘しているように、時間概念において重要な「連続性」を意味し、〈次から次への繋がっているさま〉を言う。*stetig* と語源 (*stehen*) を同じくし、〈絶えず、存続している〉を意味しうが、複数の過去把持が次から次へと連続している状態を表現していると考えてよい。また、*Abwandlung* に関しては、質的な、内容的な変化を示唆しており、新鮮なる感覚的印象から短期記憶である過去把持された状態への変化や、さらに過去把持が幾重にも遂行される状態を意

味している。

この文で重要なことは、真の時間秩序のもととなる〈擬似的時間秩序〉があり、それが「過去把持」の連続性 (Stetigkeit)、ないしは「連続体」であるという点である。それは、ただ過去把持が次から次へと起こっているという意味で時間秩序が形成されているのではなく、すでに述べたように過去把持の n 乗が形成されるのであり、その場合、過去把持の n 乗は、 $n-1$ (n マイナス 1) 乗よりも感覚の鮮明さは薄れていく。つまり、根源的感覚の有していた最高度の鮮明さは、過去把持が施されるにつれて薄まることにより、時間秩序が擬似的に形成されるのである。つまり、われわれの短期記憶の段階においては、意識において鮮明さが薄れたものほど、より遠い過去の瞬間の出来事であることを意味している。

さらに次の文が続く。

私が音に照準をあわせ、注意深く《横の志向性》のうちに生きる場合 (すなわち、そのつどの音の今の感覚たる根元的感覚と、経過した音の諸点の系列の第一次記憶たる過去把持的変遷とのうちに生き、そして根元的諸感覚とすでに存在する過去把持との過去把持的変遷の流れのうちに常に統一性を経験している横の志向性のうちに生きる場合) には、持続する音がそこに現成し、しかも持続したまま次第に自己を拡大するのである。(立松訳：108頁)

Nehme ich die Richtung auf dem Ton, lebe ich mich aufmerksam in die “Querintentionalität” ein (in die Urempfindung als Empfindung vom jeweiligen Ton-Jetzt, in die retentionalen Abwandlungen als primäre Erinnerungen der Reihe der abgelaufenen Ton-Punkte und im Fluß der retentionalen Abwandlungen der Urempfindungen und der schon vorhandenen Retentionen die Einheit immerfort erfahrende), so steht der dauernde Ton da, sich in seiner Dauer immerfort erweiternd. (H.X., S. 82)

If I direct my interest towards the tone, if I immerse myself attentively in the “transverse intentionality” (in the primal sensation as sensation of the actually present tone-now, in the retentional modifications as primary memories of the series of elapsed tone-points and as continually experiencing the unity in the flow of retentional modifications of the primal sensations and of the retentions that are already on hand), then the enduring tone stands before me, constantly expanding in its duration.

もし私とその音の方に関心を向け、私が注意深く、「横切る志向性」へと沈潜すると (と

いうことは、実際に現在鳴っている音の今の感覚としての第一次的感覚に沈潜し、そして一連の鳴り終わったばかりの音の時点の第一次的記憶としての過去把持的諸変様へと沈潜し、そして連続的に、第一次的感覚とすでに手元にある諸把持の把持的諸変様の流れの統一を経験すると)、持続する音が、絶えず持続において拡張しながら、私の前に立ち上がる。

ここで注意すべきは、*Querintentionalität* の解釈である。そして、同時にその訳語に関して、問題が起こる。基本的には、ここでは時間や音の流れに沿った方向についてしか言及されていない。つまり、*Querintentionalität* ということでは言及されているのは、根源的な感覚印象 (*Urempfindung* は、われわれは「根源的感覚」と訳すことにしていた) に対して過去把持が施され、さらにまた新たに過去把持が施されるというプロセスである。つまり、流れに沿った方向の現象とも解釈されうる。時間意識の流れ自体は、当然のことながら水平方向のベクトルを意味する。Brough は、従来 Churchill が行った翻訳に対して、この箇所はわざわざ、比較的長い注をつけて、その事情を説明している。それによれば、この箇所では、Churchill の訳語を継承するという。つまり、*transverse intentionality* という、もともと Church が使用していた訳語を踏襲するという。ちなみに、フランス語訳も *l'intentionnalité transversale* となっている³。その理由は、「私は、この場合の流れの志向性を、内在的時間の内で持続し、走り去っていく内在的対象に向かって方向づけられているものと解釈する (そして、もしその内在的対象が適切な種類の作用であるならば超越的对象に向かっていているものと解釈する)。私は、その内在的対象を、それを志向し、あるいは構成している絶対的流れとは異なったレベルにあるものとしている。したがって、その内在的対象に向かって方向づけられた志向性は、その [絶対的] 流れの有する方向性を切断する (*cut across*) ものと言われるかもしれない。」(Brough 英訳、p. 86注11)

さて、その *Querintentionalität* であるが、*transverse intentionality* と訳したところで「横の」、「横断的」なのか、あるいは「斜めの」、「斜の」といったことなのか解釈が分かれるだろう。場合によっては、横切る対象が横たわっていたら上下方向に切るということになり、「縦」という解釈も生じる。つまり、本論考図5で提示しておいたように、フッサールでは時間意識の流れの方向である水平方向を基準にする場合と、それが意識の記憶領域へと沈下する方向を考えている場合があり、「横」と「縦」という概念は一義的に確定できないという事情がある。しかも、*transverse* とは、対象となる物体に対して、それが長い方向と同方向で切断するという動きを表示することもありうる。

以上を図に表すと以下のようなになる。

“transverse intentionality”の二つの可能性

{ longitudinal 長手(ながて)方向
 { transverse 短手(みじかで)方向

Quer: 流れを遮る、横切る

図8

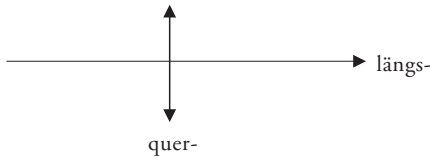


図9 水平方向（左右）を基準とした場合

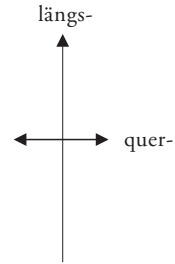


図10 垂直方向（上下）を基準とした場合

以上のように quer-、あるいは transverse という表現だけで、「横」か「縦」かを判断することはできない。どちらも成立するからである。

そこでもう一度 Brough の解釈に戻ろう。彼によると、Querintentionalität とは、「内在的時間の内でも持続し、走り去っていく内在的対象に向かって方向づけられている」ものであり、「その内在的対象を、それを志向し、あるいは構成している絶対的流れとは異なったレベルにあるもの」であるという。そうすると、今までのわれわれの分析の中では、まずは、図6のように絶対的時間流の水平方向の進行において、対象が内在的であれ、超越的であれ、そもそも一次的なスキーマしかないのであるから、同一方向に進み、ベクトルも同じ横方向の志向性を指示しており、それは同じ横方向に形成されていく過去把持の連鎖を貫いている志向性をいうと解釈することができよう。〈過去把持の過去把持〉の流れを貫いて内部に形成された志向性である。

しかしその場合、疑問が浮かぶ。そのような「長手方向」に貫くことを「横断的」というのか、という問題である。むしろ quer- は、本論考の図2や図4で記述された二次元的スキームにおいて、根源的時間意識の流れである水平方向とは違った、「斜め」のラインを指していると考えるのが自然であろう。これは、その都度の瞬間的「今」においては過去の事象の記憶の一部を形成しつつ、全体としては過去の「今」において感覚的に与えられた音の感覚印象まで遡ることができる志向性である。われわれは前稿においてすでに指摘しておいたように（拙論「フッサール初期時間論の基本概念とアポリア (I)」 p. 7)、quer- とは、「斜向かいの」というように、「斜」の方向性をも意味することができる。つまり、図2でいえば、斜めに下降して行く志向性であり、それは必ず根源的印象において鮮明に与えられた対象について発現する経験

である。図2や図4のように二次元的な表示をすれば、根源的な絶対的時間意識の流れとは、あえて「違うレベル」であることが明確になるのである。Broughが *quer-* を *transverse* と翻訳した意図もそこにあると思われる。しかも、このセクションではすぐに *Längsintentionalität* が出てくる。Broughは、それを *the horizontal intentionality* と訳している。水平方向とは、明らかに左右方向であり、根源的に時間意識の流れの方向である。

この段落の次の文を分析する前に、「持続する音がそこに現成し、しかも持続したまま次第に自己を拡大するのである」(…, so steht der dauernde Ton da, sich in seiner Dauer immerfort erweiternd.) とある事態に関して解釈しておかねばならない。ここの部分の解釈は、水平方向のスキーマで考えると、音が持続する限り音は新たに出現する感覚印象の方向に拡張していくことになる。それと同時に、最初に音響としての時間客観が与えられ、音の感覚が最初に生じた時点への志向性は、保持されているのである。

また、垂直方向の記憶の領域まで書き加えられる二次元的スキーマによれば、§10のダイアグラムで見られるような「縦の志向性」(Ordinate) が自らを拡張していくという現象に対応している。しかし、それは過去把持の連鎖が成立していくということであり、あくまでも感覚印象によって与えられた対象とその内在化された対象に向かう志向性は、二次元的スキーマにおいては、対象への志向性が保持されているという「斜めの下降線」に対応していると考えられよう。図4でいえば、左上から右下へと下降する線である。そして、これが自らを拡大させていくということは、図4でいえば、水平の左から右へと流れる線と左上から右下へと下降していく線との間の「縦の志向性」の線分が、ある時点までは拡大していくということなのである。その音の持続が途絶えてしまえば、一定の幅の持続があったということが、段々と記憶のそこへと沈んでいくだけで、その幅自体は、広がっていかない。Querintentionalität と名指された志向性は、二次元的スキーマの図表では、上下方向のベクトルに対応するというのではなく、むしろ、左から右へと滑り込む「斜の志向性」に対応すると考えられる。

さて、Querintentionalität の記述の直後に、Längsintentionalität についての記述が続く。見てみよう。

《縦の志向性》とその中で構成されるものとに定位する場合には、私は反省の視線を(一定の期間持続した)音から〈ある一点の後の前一共在の中の新しい根元的感覚〉と〈連続的な一列の後に、その根元的感覚と《共在的》に過去把持されたもの〉とへ転ずるのである。(邦訳：108頁)

Stelle ich mich auf die “Längsintentionalität” ein und auf das in ihr sich Konstituierende, so werfe ich den reflektierenden Blick vom Ton (der so und so lange gedauert hat) auf das im Vorzugleich nach einem Punkt Neue der Urempfindung und das nach einer stetigen Reihe

“zugleich” damit Retinierte.

If I focus on the “horizontal intentionality” and on what is becoming constituted in it, I turn my reflective regard away from the tone (which has endured for such and such a length of time) towards what is new in the way of primal sensation at one point in the retentional being-all-at-once and towards what is retained “all at once” with this new primal sensation in a continuous series.

「水平方向の志向性」に焦点を合わせると、そして水平方向の志向性によって構成されるものに焦点を合わせると、私は自分の反省的眼差しを（これこれといった一定の時間の長さにおいて持続している）特定の音からそらし、〈過去把持によって、全てが一度に把持されている中で、ある一点での根源的感覚の系列に繋がりつつも、後から新たに与えられているもの〉へ向かっていると同時に、〈一連のこの新たな根源的感覚とともにすべてが一緒に保持されているもの〉にも向かうのである。

ここで言っているのは、図4でいえば、 t_0 と t_1 と t_2 とを繋ぐ、根源的時間意識の流れの方向に沿った「横の志向性」、つまり「流れに沿った志向性」に注目する際に何が考察されるか、である。つまり、特定の一つの音から視線を転じると、 t_0 と t_1 と t_2 といった、一連の音へ、ないしはそれらの音の一連の感覚印象へと注意することになるということである。図7では①、②、③といった、一連の音の連続体が認識されるようになるのである。そこで、図4と図7を統合して作図すると図11のようになる。

この図において、二次元的スキームでの図4の t_2 の段階での縦の項を水平に描いたものが、図7となるのである。結局、Längsintentionalitätを「縦の志向性」と訳し、上下方向の志向性と解するのは、図4の t_2 の段階を示唆しているのであり、「水平方向の志向性」と解すると、図7の一次元的スキームで考えていると解することができる。

問題は、この文の中の「根元的感覚のある一点の後の前一共在の中の新たなるもの」(das im Vor-Zugleich nach einem Punkt Neue der Uempfindung)と「連続的な一列の後に、その根元的感覚と《共在的》に過去把持されたもの」(das nach einer stetigen Reihe “zugleich” damit Retinierte)という表現の意味である。もちろん、前者の「根元的感覚の新たなるもの」とは、図4の t_2 における縦系列の連鎖の最上位に位置する、その都度の〈感覚的印象〉である。そして、後者の《《共在的》に過去把持されたもの》とは、その都度、前者の下位に繋がっている過去把持の連鎖である。そして、そのような一次元的構造体が、水平方向に繋がっているということが、Längsintentionalitätの意味なのである。つまり、Längsintentionalitätということで、縦方向のその都度のy軸の一つ一つに注目すれば、それは「縦の志向性」と訳したほう

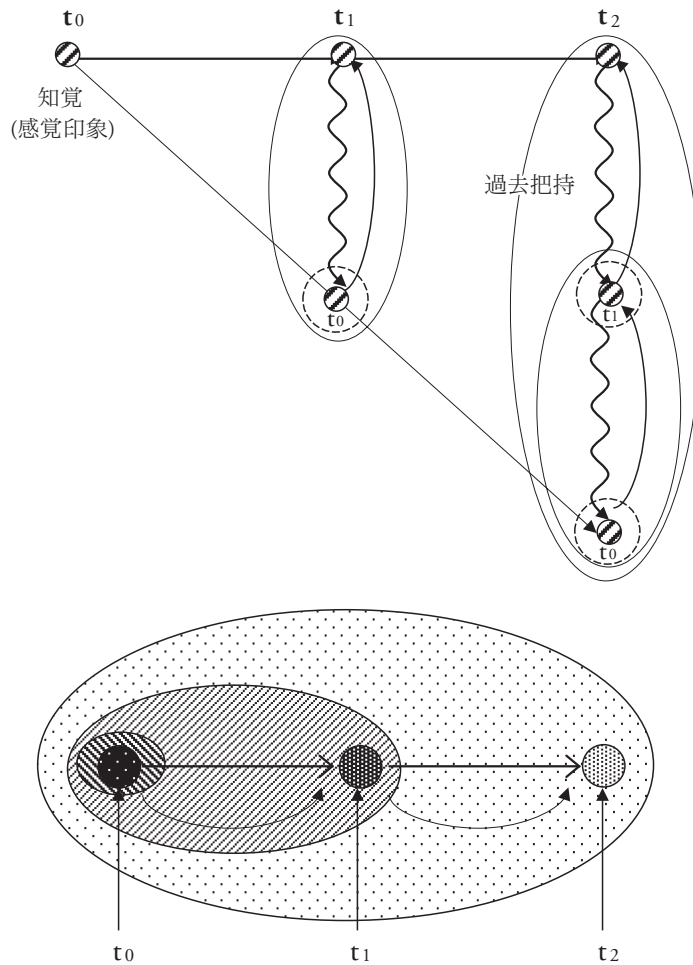


図11 図4と図7の統合

が適切だが、問題はそのような〈縦方向に連なっている連鎖から構成されている、それ自体では横方向に展開している連続体〉を *Längsintentionalität* というとき、「水平方向の志向性」と訳すほうが適切であると言える。

(第一章はこれで終わり、第二章では、Husserliana Band X での Nr. 50の分析をする)

注

- 1) この論文は、拙論「フッサール初期時間論の基本概念とアポリア (I)」名古屋大学文学研究科編『名古屋大学文学部研究論集』(哲学編) 第61巻、2015年、pp. 45-73の続編である。
- 2) 時間論のテキストは、Husserliana Band X, Martinus Nijhoff, 1966と、その英訳: Edmund Husserl, *On the Phenomenology of the Consciousness of Internal Time* (1893-1917), translated by John Barnett Brough, Kluwer Academic Publishers, 1991を使用した。分析の対象とした邦訳は、エドムント・フッサール『内的時間意識の現象学』みすず書房、1967¹、1977¹²である。
- 3) Edmund Husserl, *Leçons pour une phénoménologie de la conscience intime du temps*, traduit par Henri Dussort, P.U.F., 1964, p. 107.

キーワード：フッサール、時間意識、Längsintentionalität、Querintentionalität

Abstract

The Fundamental Conceptions and Aporiae in Husserl's Early Theory of Time-Consciousness (II)

Isamu Miyahara

We investigate the meaning of “the double intentionality” which is proposed in the time-diagram in the text of Husserl's phenomenological analysis of inner time consciousness. Our main question is how we should think the relation of the two terms, namely; “Längsintentionalität” and “Querintentionalität.” According to our opinion, it is very problematic whether is right, Husserl's term “Längsintentionalität” is “vertical” or “horizontal.” If we should interpret Husserl's term “Längsintentionalität” with “vertical intentionality,” the term “Quer-” must be interpreted with “horizontal.” It seems to be very strange, and very difficult to understand consequently. So we conclude that we should interpret it to be a “horizontal intentionality,” and “Querintentionalität” must be interpreted as the intentionality which diagonally goes down to the right. It indicates the line which connects the original impression and the series of adumbration of modified retentions of the same tone. Concerning “Längsintentionalität” we have proposed a new interpretation according to which the prefix “Längs-” can be interpreted either “horizontal” or “vertical,” depending on which one of the two opposite ways to draw the time-diagram is employed, so that an one-dimensional or a two-dimensional coordinate system results.

Keywords: Husserl, time-consciousness, Längsintentionalität, Querintentionalität